

易 簀

國原吉之助

岡さん、あなたが簀を易えられてから八ヶ月たちました。この間、在りし日のあなたの音容にときどきこう話しかけてきたものです。

昭和二十八年四月中旬のある夕暮、松本さんの呼び声でわたしは下宿の二階の廊下に出て見ると、彼はあなたと一緒に道路から見上げていました。あなたを私に紹介するため、どこかへ連れ出したいとのことでした。彼のいつもの友情に感謝しつつ、そして、初対面のあなたへの非礼を詫びながら、申し出を断りました。その四月から私は大阪の女学校へ勤務し始め、早朝六時前の起床を強いられていましたし、たまたまその時、油絵を画いていて座敷が乱れ、上ってもらえなかったのです。

この数日前、松平先生が、*παῖδρά γοῦν ἀπ' ὁμμάτων*、「岡君という優秀な学生が大学院に入ってくるよ」と仰言っていたばかりでした。今もあの時の私の態度を咎めるかのような二人の暗い夕影をはっきりと思い出せます。

その後私は堺の浜寺海岸に居を移し、やがて枚方に轉じて結婚したあと、そしてあなたがドイツ留学に旅立つ前に、あなたを拙宅に迎えて自責の念から解き放たれました。

あなたの人柄に惹かれるようになったのは、あなたが京大に帰られて、私が備後の国の生家にたびたび帰省するようになって、途中京都に下車するくせがついてからのことです。五十年父が亡くなってから老母一人を他人に任せているという罪の意識がそうさせていたのですね。

あなたは何度か私を食事に誘ってくれました。そうです、あの時は約束までしていて、その直前に私の突発事故で容赦を乞うたことは、今思い出しても心が疼きます。そしてあの時のお手紙も、そう、あの時の遠い所へのお電話も、あなたの好意をどれほど喜び感謝したことでしょう。

昭和五十四年三月、松平先生の御退官記念パーティーの席上、私はあなたにこう約束して、自分の決意を固めたのです。「いずれプロペルティウスで博士論文を提出するので、よろしく」と。それから数年後（六十一年）、神戸大学での学会の折り、控室にいた私を見つけて、あなたは近づき「プロペルティウスはどうですか」と尋ねました。いや、催促したのですね。私は至極さっぱりとこう答えました。「諦めました。私と同じテーマで方法論も似ているが、遙

かに精緻で長大なプロペルティウスの著書がでたので、断念したのです」。すると即座にあなたは「それはStahlでしょう。Stahlだ。そうでしょう」。その確信にみちた言葉に私は改めてあなたに脱帽しながら、こんなあなたの前に恥を晒さなくて良かったと思いつつ、他方で、こんなあなただからこそ読んでもらいたかったと、矛盾した気持ちを味いました。

あなたから私は、学問の王に仕えているという内に秘めたる自恃と、そこからおのずと外に表われる謙遜を教わりました。西洋古典学は、たんに古代の学であるばかりでなく、人間の学であること、それ故「文辞のみに以てする者は陋なり」を心得ていて、あなたは学でもって身を修めていたのです。

このことは六月にあなたのお宅でうかがった奥様のお話から確信できるのです。京大退官の平成六年三月前後からのあなたの多忙と心労は、御両親の病気によって頂点に達しました。父君が五年十二月に脳梗塞で、母君が胆石で六年五月に入院され、それぞれ母君が七年四月、父君が八年九月に亡くなられるまで、あなたは見舞と看病に体力と孝を盡くし、のみならず夜には奥様と交替で病室に泊ることも度々あった由。

その結果あなたは自分の体の変調に気付くのが遅れ、気付いても検診を先へ先へと延ばすうちに、とうとうレントゲン検査（七年九月）も大腸癌の手術（八年二月）も手おくれとなったのだと私には断言できるのです。さらに驚いたことに、あなたは最後の入院となる十一年十二月直前の十一月に、二十日間も自宅に、ドイツの友人夫妻を泊めていたとは。たとい兄弟のなかったあなたがこの友人を「兄弟の如く」思っていたとしても、私如き者には、ただあなたへのいとおしさで胸をしめつけられる思いがするだけです。

しかしあなたは御両親の看病にせよ、ドイツ人の友人の持て成しにせよ、自己犠牲などといった気持ちからではなく、ごく自然にそうできたのだと思えるのです。enimvero pietate et religione omnes superavisti, in perpetuum, amice, ave atque vale!

平成十二年十一月三日記